

# ホリスティック感性教育による コミュニティビジネス実践論

—「“ミニたまゆり”子どものまち」プロジェクト事例研究—

さか い ち ろう  
酒 井 一 郎

## 〈要 旨〉

筆者は本学人間福祉学部地域福祉学科で地域ベンチャーやコミュニティビジネスの実践に関する研究と教育を行っている者である。今年2月に、ある研究会でたまたまドイツのミュンヘン市で2年に一度開催される「ミニ・ミュンヘン子どものまち」の紹介を受け、それが子どもたちが遊びながら働き、自分たちでまちづくりをする擬似社会体験の場であることを知った。知識を補完し豊かにする感性を重視し、いのちのつながりを広くかつ深く追求するホリスティック感性教育をコミュニティビジネス実践の場で実現しようとしている筆者にとって、「ミニ・ミュンヘン」は格好の教材と思われた。したがって「ミニ・ミュンヘン」のコンセプトを生かしながら田園調布学園大学でも子どものまちづくりを支援する「“ミニたまゆり”子どものまち」プロジェクトを実行することを企画した。

企画に当たって、筆者の専門演習の学生を実行委員とする“ミニたまゆり”プロジェクトチームを編成すると同時に、マーケティング戦略とプロジェクト・マネジメント手法を導入して目的達成を確実にするための対策をとった。

今年11月5日と6日の両日予定通り“ミニたまゆり”イベントが開催され、500人以上の子どもたちが来訪した。子どもたちは生き生きと働き、おカネを稼ぎ、そのおカネでものを買うという初めての体験をして“ミニたまゆり”を楽しんだ。全般に“ミニたまゆり”は好評で、第1回目の催しとしては所期の目的を達したものと考えている。

## 〈キーワード〉

ミニ・ミュンヘン、ミニたまゆり、子どものまち、ホリスティック感性教育、コミュニティビジネス、マーケティング、プロジェクト・マネジメント

## はじめに

2002年4月から筆者は田園調布学園大学人間福祉学部でホリスティック感性教育によるコミュニティビジネス／地域ベンチャーに関する研究教育活動を行っている。ホリスティック教育は、助け助けられる喜び、与え与えられる喜びを深く体験させ、他者との相互扶助の「かかわりあい」の中で、いのちの「つながり」を実感し、「意味ある生」を獲得さ

せることをめざす感性教育である<sup>1)</sup>。幸いなことに、田園調布学園の初代校長川村理助氏が提唱した「捨我精進」の建学の精神はこのホリスティック感性教育の理念とも重なるものである。

2005年2月18日に、筆者は東京麹町区役所で開催された“子どもの参画情報センター”研究例会の「『ミニ・ミュンヘン』～遊びの都市の魅力と日本における試み～」と題した映像上映&報告会に出席した。そこでドイツのミュンヘン市で子どもたちが遊びを通して働く体験をし自分たちでまちづくりをする「ミニ・ミュンヘン」プロジェクトが紹介された。子どもたちが遊びを通して社会とのつながりを体得するホリスティックな仕組みに筆者は深い感銘を受けた。現在のわが国の地域社会では子どもたちは遊び場をなくし、お互いにかかわり合いつながりあう体験をする機会を欠いている。したがってこの「ミニ・ミュンヘン」のような催しがわが国でも出来れば間違いなく地域の子どもたちに喜んでもらえる。しかし「ミニ・ミュンヘン」には20年の歴史と夏休みに3週間にわたって毎日2000人もの子どもを集める規模の大きさがあり、わが国で真似をしようとしてすぐには実現が不可能であると思われた。ところが幸いなことに、ミニ・ミュンヘンの理念を理解し、それにそってわが国でも「ミニさくら」子どものまちを千葉県佐倉市で開催していることを知った。スケールダウンされた形ではあるが、「ミニさくら」が日本の地で実行されていることに勇気づけられて、筆者等は田園調布学園大学でもこのような催しを実現しようと決意し、それを早速実行に移すことにした。

本報告は、ホリスティック感性教育の文脈の中で、地域ベンチャー活動の一つの試みとして実践された“ミニたまゆり”子どものまち」プロジェクトの報告書である。筆者は経営学とくにマーケティング戦略や経営戦略論も研究する者であるから、“ミニたまゆり”プロジェクトの計画と実行に当たり、目標達成の成功度を高めるためにマーケティング論やプロジェクト・マネジメント論の手法を積極的に援用することとした。

## 1. ホリスティック感性教育論

ホリスティック感性教育の「ホリスティック」という言葉は、元々「ホーリズム(holism) 的な」という意味のギリシャ語のホロス(holos)を語源としており、全体的、包括的、総合的、全人的、全関連的という意味である<sup>2)</sup>。ホーリズム(全体論)という言葉は、1926年に、哲学者のJ. C.スマッツが著書『ホーリズムと進化』の中で初めて使った言葉で、「ある部分をいくら積み重ねても、決して全体には到達できない。なぜならば、全体は部分の総和よりはるかに大きなものだからである」として、デカルト＝ニュートンの要素分析的・機械的パラダイムに対するアンティテーゼとして、現代科学と東洋思想を融合させる全体論的ホリスティック・パラダイムを提唱したのである。

1) 高橋史朗『ホリスティック教育』モラロジー研究所、2001年、80頁

2) 同上、21-22頁

このスマッツの全体論を教育論へと発展させたのが現代の代表的ホリスティック教育論者といわれるジョン・ミラーである。彼は「ホリスティック教育は、『かかわり』に焦点を当てた教育である。すなわち、論理的思考と直感との『かかわり』、知の様々な分野の『かかわり』、個人とコミュニティとの『かかわり』、そして自我と自己との『かかわり』など。ホリスティック教育においては、学習者はこれらの『かかわり』を深く追求し、この『かかわり』をより適切なものに変容していくために必要な力を得る」のである<sup>3)</sup>。このように全人教育を志向するホリスティック教育の理念とは、意志—感情—思考—直感の「かかわり」や「つながり」を重視するもので、大学や学校の教育においては様々な教科・領域のつながりから総合的な学習への志向、家庭—学校—地域の「かかわり」や「つながり」から生涯学習社会への志向、個人と人類共同体との「かかわり」や「つながり」から地球市民教育の志向へと広がる性質をもっている。

## 2. 遊びとまちのエコロジーと「ミニ・ミュンヘン」

「教育—この言葉は今日何もよい響きを持たない。学校や授業、拘束、仕事、つらい教え、教えられという臭いがする。私たちは次のように考える。教育は養育や教えることとは別なものである。すなわち、楽しみや喜び、興味、誘惑、好奇心、深く考える喜び、独自の活動、情報欲、成功感、共同性といったものに結びつくものだ」と。

ミュンヘン教育活動協会<sup>4)</sup>

かつて「まちに遊ぶ」ことが、子どもたちにとって人間と環境の生態的つながりを自然に学ぶ最高の場であった<sup>5)</sup>。16世紀オランダの画家ブリュウゲルの絵画「子どもの遊戯」などが子どもの遊びとまちの様子を活写している。しかし今日のまちの空間のなかでは子どもたちの居場所がどんどんなくなり、子どもたちも自宅に閉じこもってファミコンにかじりついたり、放課後に塾通いをして、まちに姿を見せる時間的余裕を失っている。その結果、友だちと人間関係をつくったり、年上や年下の世代の異なる人々と接触する機会をなくし、まちの一員としての社会的能力の成長にひずみを抱えている。ミニ・ミュンヘン型子どものまちのコンセプトは、子どもたちの遊びを中心としながら、働く意義やまち全体へのつながりを体感させる場を提供することにある。遊びを通して社会環境とつながるというこのエコロジカルかつホリスティックな児童教育コンセプトは、ミュンヘン教育活動協会が開発し、ミュンヘン市や教育支援諸財団の支援を受けて「ミニ・ミュンヘン」という形で実行に移されたもので、20年の歴史を数えている<sup>6)</sup>。

このイベントはドイツ・ミュンヘン市の旧オリンピック会場の一部（競輪場）を借切っ

3) 同上, 24頁

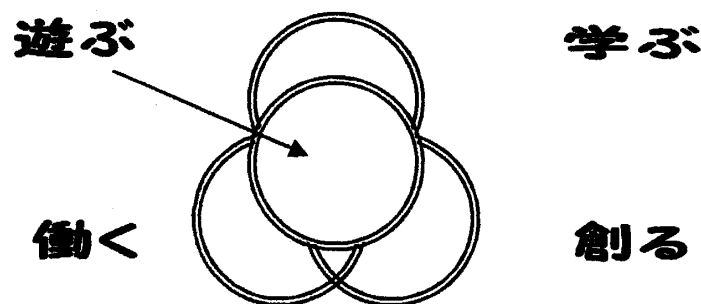
4) 木下勇『遊びと街のエコロジー』丸善, 2006年, 199頁

5) 同上, 49頁

6) 12. Mini Muenchen International 2004 im Olympiapark (03.-21.08.2004)

(<http://www.ganz-muenchen.de/freizeit/kinder/minimuenchen/2004/start.html>)

て2年に1度夏休み中に3週間にわたって実施され、毎日平均2000人の子どもが参加する。子どものまちなちに入場できるのは7～15歳の子どもだけで、大人はインフラ等のサポーターを除いて入場資格はない。まちなちの市民である子どもたちは、大人の干渉のないところで、自分たちの自主性と独創力を自由に発揮させ、新しいアイデアをどんどん繰り出しながら、まちなち自体をつねに発達させ成長させてダイナミックなまちなちづくりを展開する。これら子どもの創発性を重視したまちなちづくりのコンセプトにより、ミニ・ミュンヘン型子どものまちなちプロジェクトはわが国の各地で一般にみられる各種福祉施設のお祭りや子育てフェスタなどのイベントとは明確に一線を画す、優れた児童教育上の特徴 (Excellence) をもつ独特の催しとなっている。



歴史的には子どもの遊び場づくりに関しては、デンマークのソーレンセンが提唱し実践したプレイパーク (冒険遊び場) がある<sup>7)</sup>。わが国でも、羽根木プレーパーク、プレーパークせたがや、湊山プレーパーク、どんぐり山プレーパーク等がインターネットにホームページを掲載している<sup>8)</sup>。プレイパークは子どもたちが自由に遊べる公園であるが、バスを巡回させて子どもたちに移動式の遊び場を提供するプレイバスの事業もある。同じくインターネット上で、ぐんまこどもの国=移動児童館 (プレーバス巡回) 事業、わたげの会「プレイバス」、立川キッズのプレイバス「あそびの王国」などが紹介されている<sup>9)</sup>。「ミニ・ミュンヘン」子どものまちなちもプレイバスから進化したものである。

### 3. 「ミニたまゆり」子どものまちなちの構想

田園調布学園大学の使命は社会福祉サービスの専門家を養成することにあるが、その教育研究活動は教室やキャンパスの枠を越え、地域、国家、世界へとつながるホリスティックな広がりをもつ必要がある。一方、少子化傾向にあるわが国社会の発展のためには活力ある青少年の育成が緊急の課題となっており、その一つの施策として「子どもの居場所づくり」活動を推進する動きなども出ている。新たに子ども家庭福祉学科を新設する本学と

7) 木下勇, 前掲書, 65頁

8) NPO 日本冒険遊び場づくり協会ホームページ  
(<http://www.ipa-japan.org/asobiba/>) 2005年11月14日

9) ぐんまこどもの国児童館, 移動児童館 (プレーバス巡回) 授業報告書  
(<http://www.sunfield.ne.jp/kodomo01/htm/idoujihoukoku/pdf>) 2005年11月24日

しては、児童教育・青少年育成のために「子どもの居場所づくり」のような活動に積極的に貢献する義務がある。

こうした観点から筆者等は今年の田園調布学園大学の学園祭（DCU 祭）と歩調を合わせて「“ミニたまゆり”子どものまち」プロジェクトを実施することにした。この“ミニたまゆり”プロジェクトは、「ミニ・ミュンヘン」の理念にもとづき、子どもの主体性を重視することによって、かれらが遊びを通して働き、自分たちの手でまちづくりを行うのを支援するものである。また、このような子どもたちの自立的活動を本学の学生がサポーターとして支援することにより、子どもとのふれあいを通して視野を広げ、かつ地域ベンチャーの体験をいささかでも身に付けることをめざす大学教育活動でもある。

しかし理念はそうであっても、筆者も本学の学生たちも学園祭のような内輪の行事の体験はあっても、“ミニたまゆり”が意図しているような地域の子どものための地域活動の経験は皆無であった。したがって好むと好まざるをえず、“ミニたまゆり”はまず机上のプランからスターをすることとなった。そのプランの下敷きとなったのが次のような教育理論と経営学的方法論である。

教育理論：ホリスティック感性教育論。その他に遊びとまちのエコロジー論<sup>10)</sup>、子どもの発達と育児支援論<sup>11)</sup>、児童福祉論<sup>12)</sup>などを参考にさせてもらった。

経営学的方法論：コミュニティビジネス戦略論<sup>13)</sup>、マーケティング論<sup>14)</sup>、ISO10006を含むプロジェクトマネジメント論<sup>15)</sup>、コミュニティワーク論<sup>16)</sup>。

筆者等は“ミニたまゆり”を企画するに当たって、代表者中村桃子氏のご好意で佐倉市の“ミニさくら”をベンチマーキングさせていただいた<sup>17)</sup>。“ミニさくら”は中村氏が「ミニ・ミュンヘン」に触発されて同氏のリーダーシップの下に実施された催しであるが、少なくとも初回の催しは佐倉市の市民活動団体である「子ども劇場」のグループの人々が積極的な支援を行ったと聞いている。“ミニさくら”はこのような市民活動団体が活動母体となって遂行された事業であるが、筆者等にはそのような市民団体の全面的な支援はなかった。そのため本学地域福祉学科の学生、とくに筆者の専門演習の学生を中心とする実行委員会を立ち上げ、プロジェクト推進母体とすることにした。このように本学の学生や教職員という人材や大学がもつ知的かつ物的資源を活用することを前提として活動を開始

10) 木下勇，前掲書

11) 柴原君江「育児問題の変遷と地域における支援活動」『人間福祉研究』第6号，田園調布学園大学，2003年他

12) 大田由加里「子どもを取り巻く環境と子育ての社会化ーかわさき子ども総合プランを中心にー」『人間福祉研究』第2号，調布学園短期大学人間福祉学科，1999年他

13) 藤江俊彦『コミュニティビジネス戦略』第一法規，2002年他

14) フィリップ・コトラー著，木村達也訳『戦略的マーケティング』ダイヤモンド社，2001年（Philip Kotler, Kotler on Marketing, The Free Press, NY, 1999）他

15) 西村克己『プロジェクトマネジメント』日本実業出版社，2004年他

16) 松永俊文，野上文夫，渡辺武男『コミュニティワーク論』中央法規，2003年他

17) 2005年3月29日に「ミニさくら」子どものまちを見学。その他にも中村桃子氏には何度も面会をさせていただき様々なアドバイスをいただいた。この紙上をかりてお礼を申しあげたい。

した。

これらの事情が示すように必然的に次のような3点が“ミニたまゆり”の特長となった。

①子どものまちにおける学習活動の強化

(パソコン教室, 英語教室, ロボット科学教育, 理科実験, 株式投資演習, 模擬裁判)

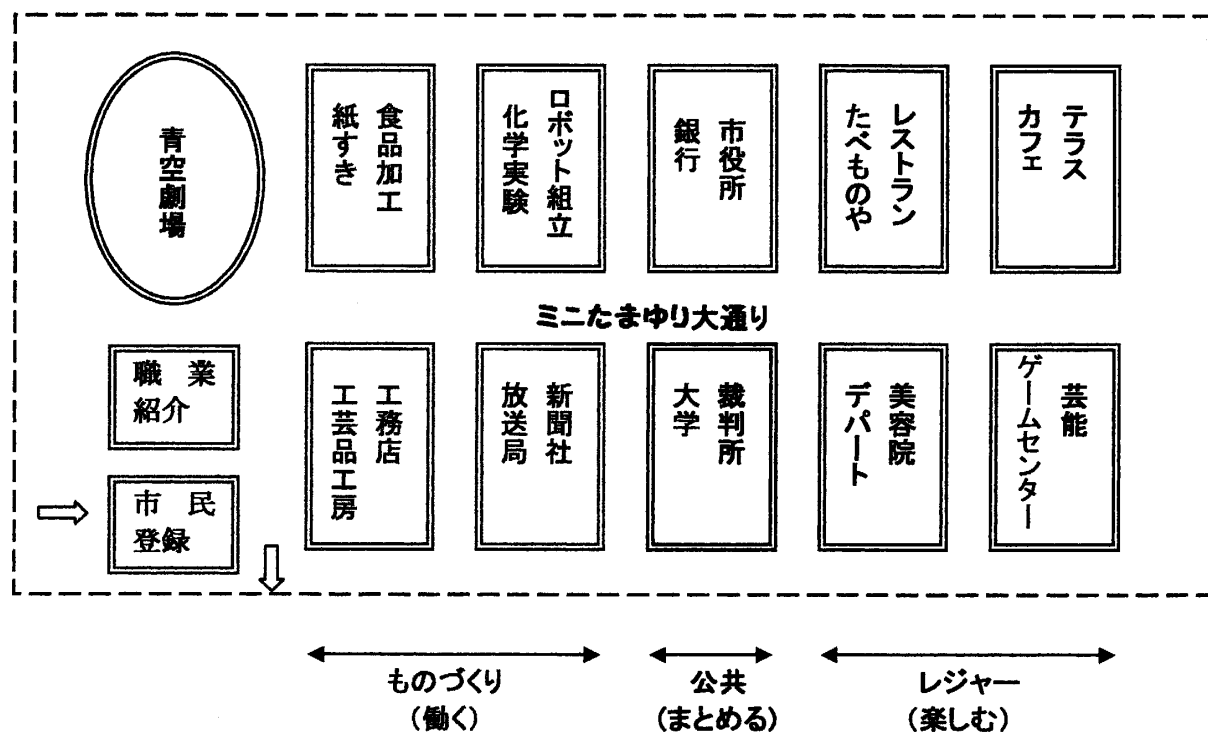
②IT 援用企画の導入 (「年賀状名人」, 「IT 名人」, 新聞社)

③業務や会場配置のシステム化, システムの可視化

(下図「“ミニたまゆり” 会場地図」参照)

次図は③のような趣旨から作成されたもので, 労働・生産地区, 娯楽・消費地区, さらに公共・行政地区の3つに明確に分け, 子どもの(遊びを通じた)労働と消費がまちづくりとどうつながっているか, どういうシステムになっているかが, 一目でわかるように考案されたものである。

図1 “ミニたまゆり”の会場地図



4. 「“ミニたまゆり” 子どものまち」事業の概要

(1) 開催時期

2005年11月5日(土)&6日(日)

午前10時 ~ 午後4時

(2) 開催場所

田園調布学園大学(DCU) 体育館外縁(正面広場および側面の駐車場)

(3) “ミニたまゆり” イベントのねらい

- ①子どもの労働体験（生産活動）
- ②子どもの娯楽（消費活動）
- ③まちのしくみの学習（学習活動）
- ④作業を通した子ども同士の異集団間&世代間の交流
- ⑤子どもと大人（サポーター）の世代間交流
- ⑥地域住民（個人&グループ）とのふれあい&連携
- ⑦本学学生の子育て支援体験

(4) 出展・設備構成

市民登録所（受付），職業紹介所，銀行，紙すき，フェルトぬいぐるみ，プラバン，スライム等の作業所，ロボット組立教室，服飾・工芸品関連工房，英語学校，パソコン教室，銀行，証券取引所，新聞社，裁判所，市役所，わたアメ，ポップコーン，焼きそば，たこ焼きなどの食べ物屋，カフェ，ゲームセンター等11張2列のテント型ブース。

(5) 遊びの仕組み

子どものまちの遊びの仕組みは次の通りである。

- ①来訪した子どもは“ミニたまゆり”ゲートを通してまちの中へ入る。
- ②まず市民登録所へ行き，登録をして市民カードをもらう。
- ③次に職業紹介所へ行き，登録をして仕事カードをもらう。
- ④まちの中のお店，会社，役所などの求人票の中から，自分の好きな仕事を選ぶ。  
学校の学習のための生徒募集もある。
- ⑤仕事カードをもって，決めた働き場所や学習場所へいく。
- ⑥店長，先生に仕事カードを渡して，仕事や勉強を始める。
- ⑦仕事が終ると店長，先生に仕事カードに働いた時間を記入してもらう。
- ⑧次に銀行へ行って，仕事や学習の時間に応じた給料をエコマネー「ユリー」で受け取る。
- ⑨税金を支払う（6ユリーの中から2ユリー，3ユリーの中から1ユリーが差し引かれる）。
- ⑩手元に残った（手取り）給料をもって，自分の好きな食べ物屋，お店，ゲームセ

図2 エコマネー「ユリー」紙幣



ンターへ行って、ユリーを使って遊ぶ。

⑩ユリーが無くなったら、また、仕事や勉強をして、給料（ユリー）をもらい遊びを続けることができる。まちを出ることもできる。

#### (6) 地域通貨（エコマネー）

“ミニたまゆり”まちの中の支払手段は地域通貨「ユリー」のみで、円貨は使用できない。「ユリー」には、1ユリー、2ユリー、4ユリーの3種類の紙幣がある。

子どもたちが、まちの中で働いたり学習すると、給料が支払われる。時給（1時間の労働/学習の対価）は6ユリーで、価値は¥100に相当する。30分の労働/学習に対しては、その半分の4ユリー（¥50相当）が支払われる。30分以下の労働/学習は30分の労働/学習とみなされて、4ユリーが支払われる。もちろん1時間以上働けば、その分多くの給料を稼ぐことができる。

隣接会場で開催している学園祭（DCU祭）や王禅寺ヨネッティ温水プールでの使用に限って、6ユリー＝¥100の兌換券が発行される。（ただし一人1枚のみ）。

#### (7) 税金

“ミニたまゆり”子どものまちにおいても、現実の社会と同じく、市民は税金を納めなければならない。暫定的な税率は1/3である。すなわち、6ユリーに対し2ユリー、3ユリーに対して1ユリー。

税金はブース・マネジャーやサポーターたち子どもスタッフの報酬や会場整備費など公共の便宜のために使用される。

#### (8) プロジェクト推進組織

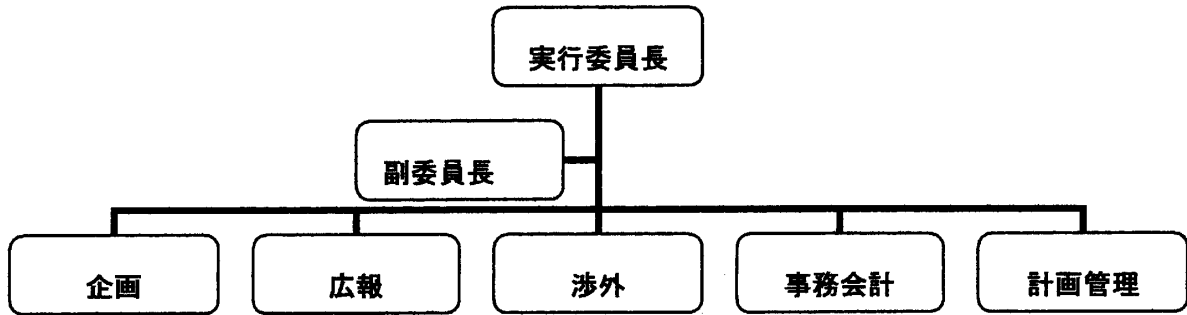
##### 1) 学内実行委員会

学内地域福祉学科、主として筆者の専門演習3年および4年ゼミ生を中心とする実行委員17名により編成。この実行委員会を支援する学生サポーター（学内で募集）約30名、さらに社会人学生数人をメンバーとするリスクマネジメント・チームを配置。

実行委員会は4年ゼミ生を委員長梅木咲恵、副委員長浅野拓也、水上真志を含め次のように組織化し、役割分担を行った。



図1 “ミニたまゆり”の会場地図



2) 地域（合同）実行委員会

8月1日に地域合同実行委員会を結成，会長に関口永吉氏（川崎市麻生区東百合丘自治会長），副会長に山崎優氏（川崎市麻生区子ども会連合会長）の就任が決定。学内実行委員会の全メンバーと地域活動有志メンバーが参加して，正式に地域合同実行委員会が発足。

(9) 運営資金

文部科学省の大学教育高度化推進特別経費として120万円の予算が認められた。

5. “ミニたまゆり”プロジェクトの実行戦略

(1) マーケティング戦略

1) 市場環境分析（SWOT 分析）

表1 市場環境分析表

子育てに関する市場環境の変化	
チャンス	リスク
行政： 子育て支援政策 文科省の施策 「子どもの居場所づくり」 川崎市等の子育て支援策	行政： 財政的支援の弱さ 予算申請に時間的に間に合わず 調査&申請の時間切れ
地域： 市民活動の活発化 少子化問題の関心向上 新百合ヶ丘駅北側の宅地開発による子ども人口の増加 学校と地域教育会議の連携による行事が活発	地域： 市民活動の連携&情報不足 子どもの居場所不足 新百合ヶ丘駅南側の子ども人口の減少 土日の子ども塾通いの一般化 学校行事と時期的な重複・競合
本学の能力・特長（「ミニさくら」と比較して）	
強み	弱み
地域福祉専門教育 川崎市等行政との強い関係 個々の教員の地域活動実績 子ども家庭福祉学科の新設	大規模な地域向けイベント未経験 提携関係にある地域活動団体なし 統合的な地域活動支援体制の欠如 未開設（平成18年4月発足）

## 2) マーケティング計画 (マーケティング・ミックス)

### i. PLACE (場所, 人脈, ネットワーク)

①開催場所 田園調布学園大学体育館外縁

②開催時期 11月5日(土)と6日(日)

③市場情報収集経路

・情報収集のチャンネル/キーポイント

川崎市役所, 川崎市教育委員会, 麻生区役所, 宮前区役所, 多摩区役所, 社会福祉協議会, 子ども文化センター, 保健福祉センター, 公民館, 子ども会など。

・イベント参加者&協力者(候補)

教育関係 小中高校生徒, 幼稚園児

民間 家庭の子どもと保護者, 子育てサークル親子, 市民活動団体と会員

④情報発信経路

・教育委員会→学校

・区役所, 社協, 子ども文化センター, 健康福祉センター, 公民館  
→子育てサークルなどボランティア・サークル

・自治会 → 地域住民

・商工会 → 会員

⑤プロジェクト推進体制

・学生実行委員会

・地域との合同実行委員会

### ii. PRODUCT (子どものまちの内容)

以下の項目に関するマーケティング調査を行う。

①子どものまちのアトラクションは何か(参加者にとって)

- ・どんな職業体験ができるか(生産活動)
- ・どんな遊びや食べものがあるか(消費活動)
- ・どんな店舗や事業所を出したいか(中高生)

②子どものまちはどのような価値を提供するか(保護者に対して)

- ・子どもがよろこんで取り組む仕事があるか
- ・大人が協力することがあるか
- ・サービスが行き届いているか(案内, 放送, インフラなど)
- ・まちの仕組みはどうなっているか, 子ども個人と全体のつながりが目に見えるように仕組みられているか
- ・全体にどのような教育効果があるか
- ・大人に対するサービスがあるか

iii. PRICE (資金計画および入場料)

①資金配分計画

②入場料をいくらにするか (最終的に無料とした)

③エコマネーをどうするか

それぞれの品物の値段をどう決めるか?

労働による収入と娯楽への支出が均衡するような各商品の値段は?

使い残したエコマネーをどうするか?

iv. PROMOTION (広報宣伝, 渉外)

①広告宣伝活動

- ・学内実行委員によるポスター, チラシ, 説明書の関係先への配布
- ・地域実行委員によるポスター, チラシ, 説明書の配布協力
- ・地域実行委員等による口コミ活動

②メディアによる広報活動

- ・新聞社等マスメディアへのコンタクト
- ・プレスリリースの配布

③渉外活動

- ・本学実行委員による関係先訪問・宣伝
- ・地域実行委員による関係先訪問・協力依頼

(2) プロジェクト・マネジメント戦略

第1フェーズ 企画・立案, 準備

i. テーマ設定と解決策

①問題提起

②テーマの設定 目的・達成目標の明確化

③関連情報の収集 「ミニ・ミュンヘン」および「ミニさくら」プロジェクト

④現状分析 SWOT 分析, 問題点と利用可能資源の把握

⑤基本方針の決定 代替案の立案と検討

ii. プロジェクトの承認

①大学教育高度化推進特別経費申請および承認

②教授会における承認

第2フェーズ プロジェクトの実行

i. 実行のための基本条件整備と準備

①5W2H による基本計画策定

②組織体制の確立 実行委員会, サポーター・チーム

③チームワークのルール 「報・連・相」の徹底と文書化による情報伝達

④マイルストーンの設定 スケジュールの節目における作業進捗の管理統制

ii. 実行計画

- ①作業計画 1 作業分割表 (WBS) の作成
- ②作業計画 2 作業記述書作成
- ③協働組織 作業責任マトリックス (TRM) によるリーダーとメンバーの役割分担
- ④スケジュール管理 ガントチャート&PERT (パート) の作成
- ⑤予算書の作成 必要な経営資源 (リソース) の明示
- ⑥リスクマネジメント リスクの洗い出しと予防対策

第3 フェーズ イベント開催と報告・評価

i. 会期中

- ①会期中の役割分担
- ②PDCA 管理サイクルの実行
- ③リスク・マネジメント (問題発生への早期対応)

ii. 会期終了後

- ①会期終了後の評価と報告書作成

6. “ミニたまゆり” 行事の成果

(1) 来場者

正式に登録した来場者499人の年齢・学年別内訳は次の通りである。

表2 来場者内訳

学年	幼児	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高校
人数	70	50	55	56	87	51	13	5	6	13	1

5日と6日の両日で合計499人の子どもが正式に市民登録をすませ、さらに数十人の登録を経ずに入場した子どもや保護者や大人の来場者を含めて約600人が「子どものまち」を訪れた。この人数は、当初の計画の1日200人、2日で400人という人数を上回ったが、混乱を招くほど多すぎもせず、主催者側にとって理想的な人数であった。それよりなにより、来訪した子どもたちが非常に生き生きと働き、かつおカネを使う体験を楽しんでいる様子を自分たちの目で確認することができたのは、責任者として本事業に取り組んできた者にとって望外の喜びであった。

この事業の成功は子どもたちのアンケートの結果や5日付読売新聞や6日付け朝日新聞や東京新聞などの好意的な報道によっても裏づけられた。

(2) アンケートによる来場者の感想

表3 来場者の感想

来場者の感想	人	来場者の感想	人
① “ミニたまゆり” へ来てよかったか？ 非常によかった	56	プラバン	3
		たこやき	3
		④お金は何に使ったか？	
まあよかった	13	駄菓子	25
あまりよくなかった	1	わたアメ	15
②来年も行われると来るか？ 絶対来る・来る	62	プラバン	8
		ダーツ	8
		スライム	8
多分来る	4	たこやき	7
わからない	4	⑤よくなかった点はあったか？	
③何がよかったか？ 全部	11	ない	36
		自分でおカネを稼げること	3
		紙すき	1
		ロボット組立	1
		わたあめ	1
		スライム	1
		税金をとられる	1

上表以外に次のような自由記述の感想がみられた。

- ・楽しかった
- ・来年も来る
- ・参加してよかった
- ・明日も来る
- ・“ミニたまゆり”サイコー
- ・仕事を増やしてほしい
- ・思ったよりお店がいっぱいあった
- ・もっとお店がたくさんあって、仕事がたくさんあるとよかったです
- ・次はカジノみたいなのをつくってほしい
- ・地域のイベントと日程が重ならないようにしてほしい (母親から)
- ・お金をとって (100円くらい) よかったのではないか (母親から)
- ・小さい子向けに15分単位くらいの仕事だと飽きずにできるのですが (母親から)
- ・市民として働き、その結果としてお給料をもらったこと、税金を納めたこと、これらを実際にできたということに大きな意義を感じています。息子の働く意欲にもおどろきました。嬉しかったです。(父親から)
- ・税金を払うのなら、一度お金を受け取ってから払うと、払ったという気持ちになり、よりよいと思う。(父親から)

(3) メールによる来場者 (保護者) の感想

「はじめまして、XX と申します。

3年生の息子が「ミニたまゆり」の案内を見てぜひ、参加したいと言っているのですが、参加するには前もって予約が必要ですか？ それとも、当日直接会場に伺えばよいのでしょうか？「働いて、お金を稼いで、遊ぼう！」という事は、実際に子供たちがお店屋さんになったり、お客さんになったりできるのでしょうか？

息子はとても楽しみにしています。時間等詳細を教えてくださいませんか？

よろしく願いいたします。」

「XX 様

メールお問合せありがとうございます。

“ミニたまゆり”への参加には予約は要りません。ロボット組立だけは人数が限られています。それ以外は自由に参加いただけます。

「働いて、お金を稼いで、遊ぼう！」という事は、実際に子供たちがお店屋さんになったり、お客さんになったりできるのでしょうか？

＝出来ます。お店屋さんになってお手伝いいただければ添付案内どおりお給金をもらえます。「ユリー」という“ミニたまゆり”だけで通用するおカネですが。お手伝いしてもらっても学習してもらってもお給金はもらえます。

5日と6日の両日、10時から16時まで開場していますので、ふるってご参加ください。」

「XX です。

お忙しい中、早速のお返事ありがとうございます。

「ミニたまゆり」とても楽しそうな企画ですね。普段、家のお手伝い以外に働く経験のない子供たちにとってとても良い経験になると思います。子供も楽しみにしていますし、ぜひ、参加させていただきたいと思います。5日は学校の行事があるので6日しか行けないのですが、6日の午前中はラグビーの練習があり、お昼頃からしか行けません。「息子は練習を休んで行く！！」と言っているのですが……。

なんだか楽しそうなのでそれもいいかな、とも思うのですが、午後からでも充分楽しむことができるかどうか、教えていただけると助かります。」

「YY です。

ミニたまゆりは正直言って予想以上に活気があったと思います。勿論主催したスタッフの方々にとっては“まだまだ”のお気持ちがあったと思いますが、日本では極めて珍しいまた歴史の浅い催しですから急に満点に近いものにはならないと思います。それにしても子供達の生き生きとした言動、新しいものに対する興味と順応の早さには驚かさ

れました。

強いて批判的なことを言えば、スタッフ（学生達？）の要領の悪さが気になりました。証券取引所での子供達への説明，進行等でなかなか前に進まず準備不足かな？ という感じ，また大人のカフェでコーヒーを求めたのですが，注文を受けてからお湯を沸かしに走ったのはご愛嬌でした。

でも，総体的に楽しく「ミニたまゆり」は成功だったと私は感じました。」

「ZZです。

トラロボット2頭は，今，ふたりの息子によって宝物の棚と決められている本棚の一番上の特等席を占有しております。楽しい企画を，ありがとうございました。7才と5才でしたが，初めて自分で動くロボットを作り，自信がついたようです。

ボランティアの若い方々にも手伝っていただいたようで，子どもたちはとてもうれしかったそうです。重ねてお礼申し上げます。

また，ユリーのエコマネー，いいですね。ロボットをつくった対価，お給料のようですね。それで本物のたこ焼きを買って食べて，お給料の意味が感覚としてつかめたようです。

ぜひまたこのような試みが，継続して運営されていきますよう，とっても期待しております。来年も，開催してくださいね！ ありがとうございました。」

#### (4) 学生実行委員&サポーターの意見

##### 1) 子どもたちの反応について

- ・働いてお金をかせぐことが嬉しかったり，楽しかった様子。色々な職場を体験できたらしく，いきいきしていた。
- ・こんなに多くの子どもたちが来たことに驚いた。そして，その子どもたちはただ来ているのではなく，たまゆりの市民になることを目的として来ていて，自分の役割をこなすようがんばっていた。また，その中で楽しむことも忘れていなかったように思えた。また，保護者の方々から，「いつからやっているんですか（今年で何年目）？」とか「来年もやるんですか」「子どもが楽しんでいたのでも，次回も開会があれば参加したいです」などという声が聞こえてきていて，子どもたちはもちろんのこと，保護者の方々にも楽しんでいただけたのではないかと感じた。そのような声を聞いて，今回のたまゆりは，多少の調整不足はあったものの成功したのだと実感した。
- ・大成功だったと思う。子供も仕事でお金を得るという子供にとって新鮮な感覚を体験できて満足していたようだ。親たちも子供が遊んでいる，働いている様子を眺めて，いい体験をさせることができたと思っているのではないか。
- ・明るく賑やかな雰囲気でも，子どもたちも楽しそうな様子だった。予想以上の人数の

子どもが来てくれたおかげで成功できてよかった。

- ・子供達が楽しく、世の中のことについて勉強できたと思います。大変よかったです。来年以降、もっとブースを増やし、子供達がお金を使える場所を増やしていけば、もっともっと活気が出てくると思います。何ととっても、子供達の多くの笑顔を見られたことに感動しました。ミニたまゆりに関わることができ、私自身楽しかったし、勉強になりました。また、多くの人と関わることができ、人の輪が広がりました。

## 2) 反省点

- ・来場者&求職者の数の割りにはブースの数が少なく、職業紹介所のメンバーは仕事を探しに走り回った。
- ・各ブースと職業紹介所の連携が上手くいかず、仕事にあぶれた子どもたちや暇のできたブースがあった。ブースでも忙しい時と暇な時の差が大きかった。
- ・今回は時間がなかったこともあって、学生や大人が手を出しすぎた。次回からはもっと子どもたちに任せるべきだ。
- ・幼児向けの仕事を考える必要がある。あるいは入場者を小学生以上に限ることも検討の余地がある。
- ・働きお金を稼ぐ所と遊びお金を使う所の区別がはっきりせずごちゃ混ぜになっていた。まちの仕組みを話し合いによってもっとはっきりさせる必要がある。
- ・小学校高学年（5，6年生）や中学生の参加が少なかった。クラブ活動などもあって参加が難しい面もあるかもしれないが、その年齢の子どもがもっと参加すればよい。
- ・証券取引所の株取引ゲームでは子どもたちでは説明が難しすぎたため、大学生が説明をしてしまった。子どもでも理解できるようもっとやさしく説明できるようにする必要がある。
- ・ポスター貼りやチラシ配りをもっと早めにやり PR に時間をかけるべきだったと思う。次回はもっと人数を集めるように働きかけ、開催期間を延ばしてやった方が楽しめると思います。
- ・親の居場所の確保も必要。

## (5) マスコミの報道

11月5日付読売新聞朝刊田園都市版は「遊びながら街づくり“体験”」という見出しの下に5日と6日の“ミニたまゆり”イベントについて報じた。6日付朝日新聞朝刊田園都市版では、「お金」稼いで仮想街づくり、麻生区で子どもの催し、というタイトルを掲載していた。同じく6日付神奈川新聞朝刊横浜・川崎版では、子供が“社会”体験、地域通貨を使って、という見出しで、また7日付東京新聞朝刊朝刊川崎版では、「働くこと楽しい、自立した気分」、就労、納税など体験、麻生区で「子どものまち」、という見出しの下



に“ミニたまゆり”の紹介を行っている。東京新聞は、参加した小学4年生の岡綾香さん(10)は、「働くことが楽しい。自分で稼ぎ自立した気分」と話していた、と記載し、神奈川新聞は酒井研究室に在籍する4年生の浅野拓也さん(21)は「世代や学校の“色”といった違いを超えて交流を深めることで、子供たちに社会性を学んでもらえれば」と話していたと紹介している。

このように上記の4紙の報道は、“ミニたまゆり”のねらいを裏書しているような報道であった。

## 7. インプリケーション

上記の来場者等の意見を参照しても、“ミニたまゆり”は一応所期の目的を達したかと思われる。この初めての“ミニたまゆり”の体験からわれわれは何を学ぶことができたであろうか？

### (1) 働くこと

上述の保護者の電子メールが伝えているように、子ども達は働いておカネを稼ぐという行為自体に強い喜びを感じているようである。われわれ実行委員は、食べ物や遊び場所が少ないので稼いだおカネを使いきれず、子どもたちから不満が出るのではないかと大変心配した。しかし子ども達はユリーを余してもそれを喜んで持ち帰った。食べたり遊んだりする店が足りないという不満はあったようだが、使い切れずに残したユリーを勿体ない、働いたのに損をした、というような声は聞かれなかった。働くこと、おカネを稼ぐこと自体に喜びや意義を見出すという「ミニ・ミュンヘン」のコンセプトの秀逸性を再確認することができた。

### (2) 子どもたちの創発性

子どもたちは最初何らかの指示を受けた後は自分で色々工夫をして仕事のやり方を進化させる創発力を持っていることを随所で実証した。

11月5日の“ミニたまゆり”開幕に先立ち10月29日に子どもサポーターを集めて「ジュニアスタッフ研修会」を開催した。その折に、近隣の長沢中学校から帰国子女を含む3年女生徒6人が参加した。実行委員会から彼女たちに英語教室の企画を依頼した。彼女たちはお互いにアイデアを出し合って数時間後には、看板、模造紙を使った教材、お買物ゲームのカードなどを手際よく準備した。6日の本番では、幼稚園の子どもにいたる年代の異なる子どもたちに自己紹介をさせたり、歌を歌わせたり、教室を大いに盛り上げて、大人たちに深い感銘を与えた。

その他にも子どもたちの創発性を裏書するケースが多々あったと思われるが、本稿の原稿締め切りまで十分な情報収集の時間がなかったため、とりあえず入手できた学生実行委員やサポーターの報告のなかからいくつかの事例を紹介する。

・子供たち（ブース・マネジャー）を見ていると、お客としてきた子供たちに対して適

切に作り方などを指導していました。また、子供たち自身でお店にもっとお客を来させるためにどのような工夫をすればよいかという点で積極的に意見を出していました。

- ・たこ焼き屋さんの仕事はとても人気があり、たくさんの子供も達が集まりました。生地を作ったり、ソースを塗ることよりも、焼くことが楽しいという感じでした。初めは一緒に生地をひっくり返していたのですが、だんだんコツを覚えてきた子供も達は大人がいなくても十分に店を任せることができました。私が思っていた以上に子供は何でも出来るなあと感心しました。そして初めて会った子供も同士でもすぐ仲良くなってしまうことに驚きました。仕事をしてお金をもらって遊ぶというものでしたが、「仕事をすることが楽しい」といった子の方が多かったと思います。また来年もやってほしいという声と楽しかったという声をたくさん聞き嬉しかったです。
- ・ダーツやマジックでは、子供も達は熱中して仕事に打ち込んでいるように感じた。またダーツでは、お客さんがいない時には、店を離れて呼び込みに行ったりもしていた。
- ・裁判官たちが模擬裁判が始まる時間が近くなってくると、自分で裁判所の看板を担いで傍聴人の勧誘に歩いていたのが、強く印象に残った。かれらは別に言われて宣伝をやっているわけではないだろうと思った。
- ・意外と10歳くらいの子供もでも、大人よりしっかりしている様子が何回か見受けられた。
- ・今回は実行委員や大人が助ける範囲が広がったが、次回は、今回の経験を踏まえて、子供に任せるウエイトが広がるだろうと思う。子供がまちの中で働いたり、遊んだりするだけでなく、子供の手でまち自体を発展させていくことがきっとできるようになる。それが最終目的であると思った。

### (3) 経営手法の有効性

“ミニたまゆり”プロジェクトは結果的には成功したと解釈されるが、この企画を発表した当初はその成果について懐疑的な見方が少なくなかった。この否定的な見方については以前に同じ場所でフリーマーケットを実施したところほとんど人が集まらなかったという失敗体験も影響したとも考えられる。

プロジェクトを振り返ってみて、口はばった言い方になって気が引けるが、筆者は“ミニたまゆり”は成功すべくして成功した、といささかの自信をもって言いたい。なぜならば、“ミニたまゆり”は「ミニ・ミュンヘン」の優れたコンセプトをベースに、本格的マーケティングとプロジェクト・マネジメント技法を援用して実施したから、目標に到達するのが自然の成り行きだった、むしろ失敗する可能性のほうが低かった、と言えるのではないだろうか。もちろん初めての企画であるから、予期せざる事態やリスクが発生することを覚悟しておくことが必要である。そのため予算の2/3に当面の支出目標を絞り

込み予想せざる追加支出の吸収余地を残すことや、地域活動の経験がない学生実行委員会では対応できない事態が発生したときに備えて数人の社会人学生からなるリスクマネジメント・チームを編成するなど次善の対策を講じた。(結果的に、経験不足の学生実行委員会を補佐したリスクマネジメント・チームの協力が事業の成功に非常な貢献をしたことが実証された。)

このようなマーケティング論とプロジェクト・マネジメント論の技法にそった方法論を適用したのがこの事業の成功の要因であると考えられる。このことは適切な経営手法を適切に利用すれば望ましい結果につながるということを示唆している。この命題を実証できたのが、本プロジェクトの一つの大きな成果であろうと思われる。

#### (4) 地域関係者の支援

上述のように、適切なマネジメント技法を援用したから経験不足にもかかわらず“ミニたまゆり”を成功させることができたと言はばったい発言をしたわけであるが、そのマネジメント計画と技法がプロジェクトの現場において地域関係者とつながりを見出し支援を得ることができたからこそ、これだけの成功がありえたのだと考えている。

川崎市経済局企画課の田村豊主幹、増田宏之主査達の強力なバックアップにより川崎市教育委員会の後援を受けることができ、近隣の小中学校へのコンタクトを有利に運ぶことができた。マスコミ報道についても支援をいただいた。川崎市麻生区齊藤孝区長、総務企画課豆白保雄主幹達、さらに麻生区東百合丘自治会関口永吉会長(“ミニたまゆり”子どものまち実行委員会会長)および麻生区子ども会連合会山崎優会長(“ミニたまゆり”子どものまち実行委員会副会長)からも色々助けていただいた。駐車場整備のための草刈機の貸与やわたアメ機の貸出しと運転指導等われわれの未経験な場面での協力は千金の価値があった。田園調布学園大学に隣接する長沢中学校では渡辺直樹校長はじめ、教員と生徒たちから全面的な協力を得ることができた。その他麻生区社会福祉協議会などの地域関係者を含め、ご支援いただいた各位にこの場を借りて感謝の意を表したい。

#### (5) ホリスティック感性教育と組織行動論

“ミニたまゆり”プロジェクトの目標の中に、学生たちの感性教育という目標が一つ含まれている。教育学者高橋史朗氏は『臨床教育学と感性教育』の中で、感性をそなえた子どもは次のような資質をもつと定義している。

- ・学習や日常生活の中で、問題を見つけ出し、その解決に意欲のある子ども
- ・想像力や創造力が豊かな子ども
- ・美しいもの崇高なものに素直に感動する子ども
- ・自分で感じ、自分で考え、自分で思ったことを、自分の言葉で表現しようとする子ども
- ・みんなと共に感じ合える子ども

この「子ども」という言葉を「学生」という言葉でおき換えると、筆者の大学における

感性教育の理念となる。“ミニたまゆり”プロジェクトを単に机上で企画したり作文したりするのに止まらず、学生たちにその実行を通して子どもたちや地域の大人たちと触れ合い、グループワークを実践しながら自分たちの感性を磨いてもらうことを意図したのである。そして次の方法で感性教育を実行することを企画した。

- ①学生の動機づけ
- ②学生の中の相互作用（グループワーク）
- ③学習諸活動の調整と教師による指導

経営組織を体系的にまとめたバーナードによれば、組織（筆者注：“ミニたまゆり”の場合、組織＝グループとなる）を構成する要素は、人間そのものではなく、人間が提供する活動や力である。したがって組織（グループ）が成立するためには、個人から組織（グループ）に必要な活動を引き出すことが必要である。すなわち「動機づけ（motivation）」が必要なのである<sup>18)</sup>。

経営学者伊丹敬之氏は、グループ運営を「場のマネジメント」と呼んだ<sup>19)</sup>。同氏は

- ①マネジメントとは、個人の行動を管理することではない。人々に協働を促すことである
- ②適切な状況設定さえできれば、人々は協働を自然に始める
- ③マネジメントの役割は、その状況設定を行うことで、あとは任せて十分であると述べている。

では、“ミニたまゆり”においてバーナードが提唱したような学生の動機づけができ、伊丹氏が指摘したような協働のための場の設定が出来ただろうか。この質問に対して筆者は残念ながら、否、不十分であった、と言わざるをえない。学生とくに実行委員を務めた3年および4年ゼミ生を本プロジェクトへ参画させるためにかれらを納得させ感動させ動機づけることに成功したかという、残念ながらそのまま首肯するわけにいかない。筆者のやり方が拙劣だったのが最大の原因であるが、もう一つの原因は、場のマネジメントに絶対的に必要な自由な時間と情報の冗長性が確保されなかったことである、と考える<sup>20)</sup>。筆者と学生たちの中でコミュニケーションに必要な接触時間が完全に不足していた。3年の学生たちは朝から晩まで授業時間がびっちり詰まっており、それが終るとすぐアルバイトに出かけ、夏休み中は2週間にわたって社会福祉実習に出かけた。4年生の半数は早々に就職先の内定をもらい、時間的にはかなりの余裕があると思われたが、やはりアルバイト

18) C. I.バーナード著、山本安次郎、田杉競、飯野春樹訳『経営者の役割』ダイヤモンド社、2002年、67-77頁  
(Chester I. Barnard, The Functions of The Executive, Harvard University Press, 1968)

19) 伊丹敬之『場のマネジメント』NTT出版、2003年、5-6頁

20) 野中郁次郎『知識創造の経営』日本経済新聞社、1994年、106、136頁

21) OJTはon the job trainingの略で、職場での仕事を通じての人材開発・教育訓練を意味する。職場・仕事を離れての教育訓練Off-JT (off the job training)と区別される。実際に仕事や作業に従事する経験を通じて仕事を覚えさせる方法である。(柴川林也編『経営用語辞典』第3版、東洋経済新報社、1992年、170頁)

22) 吉田敦彦『ホリスティック教育論』1999年、256-257頁

を一杯に取り込んで、自由に動けない状況にあった。このように3年生、4年生を問わず、いずれも日常的にタイトなスケジュールを組んでおり、“ミニたまゆり”のようなかなりの規模のプロジェクトを推進する上で、自由時間があまりにも少なすぎた。

何かの本で読んだのであるが、ある日本の経営学者が著名な経営学者であるピーター・ドラッカーに「経営者の育成に一番有効な方法は何か」と質問したところ、「優秀な経営者と行動をともにして彼の考え方ややり方を学ぶことである」と答えたという。学生（リーダー格）が筆者のそばで過ごす時間が十分とれば、筆者の考え方や仕事の進め方をOJTで学習できるはずである<sup>21)</sup>。しかし一つの用件が終るとすぐ居なくなる状態ではプロジェクト全体像を掴むことは不可能で、局所的な情報で行動せざるをえなくなる。場の全体情報を欠いた状態で個別の業務を判断すると部分的には最適であっても、全体最適とはなるとは限らない。アーサー・ケストラーはホロンという概念を提唱したが、このホロンは全体の情報と個別の情報を自分の中で統合しながら行動する関係子と呼ばれるものをさす<sup>22)</sup>。このような全体にも部分にも適したホロニックな行動を行うには、学生たちには全体情報が欠落しており、プロジェクト全体の文脈の中で個々の仕事を位置づけることができなかつたのである。

#### (6) ベンチャービジネスと役所流業務手順

既述のように“ミニたまゆり”プロジェクトはかなり駆け足で実行に移されたもので、具体的内容や資金計画は走りながら固めて行く方法を取らざるをえなかつた。初めての経験なので当初計画した内容や金額は事業の展開につれて大幅な変更を余儀なくされた。会場に出展するブースは、マーケティング調査の結果、最初計画に入っていたもののうち1/3が最後まで残り、あとは新しく加わったものだ。こういう状況から当初作成した計画書の内容の費用構成などは大幅に変更された。それにもかかわらず、事務局の説明では、半年前に文部科学省へ提出した特別経費申請書の内容から逸脱することが許されないとのことであった。大学においても役所流の手順や実績重視のルールを遵守する必要があるということは、大学において“ミニたまゆり”のように完全に新規のプロジェクトを立ち上げることは、手続き的に非常な困難を伴うことを意味することがわかつた。

この役所流の仕事の進め方は、当初策定した計画や予算と整合性を保つことが最重要課題であつて、プロジェクトが成功するかしないかは二次的・三次的重要性しかもたないのではないかと疑わせるものがある。すなわち、目的より方法がより重視されるように思われる。民間会社の仕事における最重要目標は（筆者は40年間民間会社で働き、大学へ移ってから10年に満たない）、所定の資金でもって事業が成功するかどうか、納期を守り利益を出せるかどうかであつて、資金配分の構成がどうか等の目標達成のための方法・手段については、プロジェクト責任者の権限で自由に裁量できる仕組みになっている。作業の現場で時々刻々変化する事態に対応するには、現場責任者に権限を大幅に委嘱することが効果的なのである。

## 5. むすび

“ミニたまゆり”は本年3月に発案され、それから走りながらアイデアを固めていくという方法をとらざるをえなかった。マーケティング調査のため7月頃から近隣の小中学校の校長や教頭先生と接触して意見を聴取してみると、“ミニたまゆり”の「遊びながら働きまちづくりを行う」というコンセプトが強い興味を引いていることがわかった。その一方、もっと早くからこの催しについて情報を得ておれば、学校側としてももっと違った形で協力できたのではないかという意見も多く聞かれた。その一つのアイデアとして、“ミニたまゆり”参加を目標に総合学習授業のテーマを設定する可能性について言及があった。

今回の親子裁判所の模擬裁判では法務省裁判員制度啓推進室の協力を得て、同推進室で作成した刑事事件のシナリオを使用した。しかし同推進室の現在までの裁判員制度普及活動はもっぱら成人に対してなされていたもので、未成年に対する普及活動は某中学校3年生の授業で実施されたことが一件あるだけであった。このため“ミニたまゆり”親子裁判所の模擬裁判では、時間的な制約もあって、この中学3年向けの刑事裁判のシナリオを使用することとなった。しかし結果として“ミニたまゆり”でこの模擬裁判に参加したのは中学1年生以下の子どもたちであったため、専門用語などが難しすぎた。担当した横浜地方検察庁の方々の臨機応変の対応によってできるだけわかりやすく演出してもらったが、今後は小学生や中学1・2年生でも理解できるようなやさしいシナリオと子どもの興味を引くような事件を題材とする配慮が必要であろう。こうした観点から、小学校高学年や中学校の総合学習のテーマとして模擬裁判を取り上げることができれば、今後の“ミニたまゆり”の展開に寄与することになる。

今回の“ミニたまゆり”は第1回の催しで、その準備に当たっては結果的にみて無駄なところに相当多くの時間とエネルギーを浪費し、逆にやらなければならない事に手がまわらなかった。第2回目の“ミニたまゆり”を実施するとすれば、学習効果は何倍にもなって戻ってくると期待される。したがって今回の経験を踏まえ、学内、学外の関係者とのコミュニケーションを通して、“ミニたまゆり”の今後のあり方について検討を進めたいと考える。なにはともあれ、第1回“ミニたまゆり”開催に全面的なご支援をいただいた学内学外の関係各位に感謝の意を表したい。

謝辞：この場を借りて“ミニたまゆり”実現に当たってご支援をいただいた学外・学内の関係者のみなさまに厚くお礼を申し述べます。

## 参考文献

- 卯月盛夫+ミニ・ミュンヘン研究会『ミニ・ミュンヘン—もう一つの都市—』ミニ・ミュンヘン研究会, 2005年
- 高橋史朗『ホリスティック教育』モラロジー研究所, 2001年
- 高橋史朗『感性を活かすホリスティック教育』広池学園出版社, 1996年
- 日本ホリスティック教育協会『ホリスティック教育入門』柏樹社, 1995年
- 吉田敦彦『ホリスティック教育論』1999年
- 木下 勇『遊びと街のエコロジー』丸善, 2006年
- こどもとまちづくり研究会『こどもまちづくり～面白さの冒険』風土社, 1996年
- H.サノフ著, 小野啓子, 林泰義訳『まちづくりゲーム』晶文社, 1994年
- J.ピアジェ著, 大伴茂訳『遊びの心理学』黎明書房, 1967年
- M.エンデ著, 大島かおり訳『モモ』岩波書店, 1980年
- 青井倫一『マーケティング』グローバルタスクフォース株, 2004年
- 石井淳蔵『マーケティングの神話』日本経済新聞, 1994年
- 嶋口充輝・石井淳蔵『現代マーケティング』有斐閣, 1997年
- 野口智雄『マーケティングの基本』日本経済新聞, 2000年
- フィリップ・コトラー著, 木村達也訳『戦略的マーケティング』ダイヤモンド社, 2001年 (Philip Kotler, Kotler on Marketing, The Free Press, NY, 1999)
- 秋元直樹・中西真人『プロジェクトマネジメント 業務推進力を高める』かんき出版, 2003年
- 岡村正司『プロジェクトマネジメント 国際標準を实践で活かす』日経 BP 社, 2003年
- 西村克己『プロジェクトマネジメント』日本実業出版社, 2004年
- 大利一雄『グループワーク理論とその導き方』勁草書房, 2003年
- 川村隆彦『グループワークの実際』相川書房
- 杉本敏夫・斉藤千鶴編著『コミュニティワーク入門』中央法規, 2003年
- 平野隆之・宮城孝・山口稔編『コミュニティとソーシャルワーク—地域福祉論—』有斐閣, 2001年
- 松永俊文, 野上文夫, 渡辺武男『コミュニティワーク論』中央法規, 2003年
- 村田幸子・小林雅彦編著『住民参加型の福祉活動—きらめく実践例—』ぎょうせい, 2002年
- 太田肇『ベンチャー企業の「仕事」』中公新書, 2001年
- 藤江俊彦『コミュニティビジネス戦略』第一法規, 2002年他
- 細内信孝『コミュニティ・ビジネス』中央大学出版部, 1999年
- 伊丹敬之『場のマネジメント』NTT 出版, 2003年
- 清水博『生命と場所』NTT 出版, 1992年
- Lewin, K., Field Theory in Social Science, Harper & Row, 1951 (猪俣佐登留訳『社会科学における場の理論』誠信書房, 1956)
- 野中郁次郎『知識創造の経営』日本経済新聞社, 1994年